

人形姫

山本幸久

第十回

十

「動物病院で診てもらった猫ちゃんをウチに戻したあと、須磨子すまこさんと本社にいつて、ちよつとした用事を済ませて、仕事場をでていこうとしたら、熊谷くまがいさんの息子さんたまたまが偶々やってきて、どこいくの？ って呼び止められたんです。代官山だいかんやまだと正直に答えると、いっしょにいつてもイイかなって、おっしゃいましたね。断るのも変じゃないですか。すると今度は宮沢さんが、私もいくと言いだしまして。フィギュアというものを、どうやってつくっているのか、この目でいっぺん見てみたいと」

どうして本社の職人達がこぞって、代官山のフィギュア事業部を訪れたのか、森岡恭平きょうへいが訊いたところ、溝口真純まことはえらい勢いで捲し立てた。

「宮沢さんが？」

弟の慎次しんじが怪訝けげんな顔つきになる。それはそうだ。本社で共に働く恭平さえも、宮沢がフィギュアなんて口にだして言うのを耳にしたことがなかったからだ。代官山のことなんて気にも止めていないとまでいかずとも、別世界の出来事くらいに思っていたはずなのだ。

「そうなんです。しかも宮沢さん、それだけじゃなくて、折角の機会だから後学のために、おまえもこいつて、峰みねさんを誘ったんです。そんなときまだ私、イイとも悪いとも言っていないのにですよ。しかも峰さんが職人みんなにその件をLINEでまわしちゃって」

「それで全員揃ってやってきたのか」

そう言いながら、恭平はガラス張りの壁のむこうに目をむける。広々としたオフィスにあるデスクのひとつに、宮沢をはじめとした職人達が群がっていた。経理部長こうだの幸田ちゅうだもいた。だれしもがデスクの上にあるモニターを見ている。二十代なかばと思おぼしき男性から、なにやら説明を受けているようだ。

どうしてそうなったのかはわからない。男性は椅子に腰掛けたままで、右手で忙しくペンを動かす。すると職人達がモニターを見ながら揃って「おおおおお」と驚きの声をあげた。

「こりや凄いな」「ほんと粘土みたい」「こんなことまでできるとは」

「信じられん」

なに見せられたんだろ。

恭平はまだフィギュア事業部の部長室にいるのだが、座った席からではモニターが見えないのだ。なんだったらここをでていき、確認したいくらいである。

「すみません」溝口が詫^わびた。「仕事の邪魔ですよ、私、注意してきます」

「いいんだ」慎次が引き止める。「ここで働いてるスタッフは邪魔なら邪魔とはつきり言うからだいじょうぶだよ。きみもウチでバイトしてたからわかるだろ」

「は、はあ」

職人達の反応に男性は満足げである。邪魔だと思っていたら、あんな表情にはならないだろう。

「桜井さんとは、ここにくる道すがらに会った？」

恭平が溝口に訊ねたところだ。

「私が迷子になっていたのを助けてもらったの」

照れ臭^{もじ臭}そうに桜井桃枝^{ももえ}が言う。いままで穏やかな笑みを浮かべ、恭平達のやりとりを眺めているだけだったのだ。黒のタートルネックに重ねた白シャツの襟を立て、袖を捲^かっている。そして赤みの強いピンク色のパンツといういでたちだ。恭平とおなじソファに座っているが、四人掛けの端と端である。

ふたりのあいだには、桜井の荷物があつた。ブランド物のシヨルダーバッグと、薄べつたいが縦横七十センチ以上はある黒いバッグだ。空調の加減か、ときおり桜井の甘く芳^{かぐわ}しい香りが漂ってくる。鼻で大きく吸いこみたいところだが、もちろんできるはずがない。

「前に一度、ここにきたことあるでしょ、桜井さん」と慎次。「なにどうして」

「この前もだいぶ迷つたのよ。グーグルマップで検索しながらでも、このへん道が入り組んでて、わかりづらいんですもの」

「ですよねえ」溝口が同意する。「私もバイトをはじめた頃はよく迷いました。大通りから入るのに目印だったカフェがなくなっていたときには、めっちゃ焦りましたもん」

「もつと稼いだら恵比寿^{えびす}の駅前にも引越すよ」

慎次が悔しそうに言う。口を変な形に曲げているのは、拗^すねているからだ。ずっと昔、兄の恭平が親に褒められると、まだ小学生だった慎次が、いまとおなじ顔つきになったのを思いだす。

「さつき親しげに話してたけど、桜井さんと溝口さんは面識があつたの？」

「はじめて会つたのは二月です。百貨店の陳列即売会するとき、桜井さんも参加なさつていて」

「幸田さんと熊谷さんから、森岡人形に新しく女の子が入つたと聞

いて、どんな子だろうと、私から声をかけたんですよ。そのときに名刺だけじゃなくてLINEも交換して、いつか食事にいきましょうって、ときどき連絡を取りあっていました」

そうだったのか。

陳列即売会でふたりがはじめて顔をあわせた話は、桜井から直に聞いている。でもLINEを交換したなんて聞いていない。連絡を取りあっていたこともだ。しかもそれだけではなかった。

「先月はいっしょに呑みにもいったんですよ。ねえ、桜井さん」

「それはナイショだって」

「あ、すみません」

溝口は両手で口を塞いだものの、目は笑っていた。

「ぼくには教えてくれなかったじゃないか、LINE」

そう言っつてすぐに、慎次は気まずい顔になった。思ったことをついうっかり、口にだしてしまったようだ。

「私の電話番号もメールアドレスもご存じですよ。そのうえLINEは必要ないと思ったんです。なんでしたらいまお教えしましょうか」

「いや、いい」 慎次はふたたび、口を変な形に曲げる。

ほんと、ガキの頃のまんまだな。

笑いが込み上げてくる反面、こんな調子でよくまあ、世界を相手に仕事ができるものだとも思う。だいじょうぶなのかと心配にな

るものの、だからといって、なにか手助けができるわけでもない。
「できたっ。できたぞっ」

ガラスのむこうからまた声がした。宮沢だ。何かとそちらをむいて、恭平は我が目を疑った。宮沢が椅子に座って、ペンを動かしていたからだ。スマートフォンどころかガラケーだって持っている男なのだ。信じられない。もともとその席にいた若い男性は宮沢の隣に立ち、モニターを指差している。

「やればできるじゃないの、宮沢さん」「たいしたもんだ」「俺にもやらせてくれ」「つぎは私の番だつて。さつき決めたでしょ」

「仲いいですよねえ、あのひと達」

桜井が静かに言った。彼女もガラスのむこうではしゃぐ職人達を見ていたのだ。その口ぶりはどこか羨ましうらやそうに聞こえなくもない。

「全然、仲良くないさ。しょっちゅうモメてるよ」恭平は苦笑する。

「ついこのあいだなんて峰さんと幸田さんでつかみ合いの喧嘩けんかをおっはじめようとするところを、みんなで押しとどめたんだからね」
「喧嘩するほど仲がいいって言うじゃないですか」

「桜井さんの言うとおりですよ、社長さん。あんときはあんときで、楽しかったと思いませんか？」

莫迦ぼかを言え。おかげで壁から落ちた鳩時計が、俺の頭に直撃したんだぞ。楽しいはずがないだろ。

胸の内で思いながら、恭平は溝口を軽く睨む。しかし彼女はニコニコ笑うだけだった。

宮沢と入れ替わって、峰が椅子に座り、ペンを右手で握った。モニターを見るその顔は、人形の顔を描いているときとおなじ、真剣そのものだった。

なにやっつてんだ、いったい。

これまでみんなが使っていたペンが、パソコンのなにかしらと連動しているのはわかる。だが肝心なモニターが見えないので、恭平は少し苛ついた。だれもが笑顔で、楽しそうなのも面白くない。

「トーキョーローカルサイキックのフィギュアの件なのですが」

そう言いながら、桜井は薄っぺたいバッグを引き寄せ、チャックを開く。

「そうそう。いい加減、本題に入らなきゃ。電話で話したとおり、むこうの出版社と仮契約をして、まずはサンプルを制作することになったんで、改めて桜井さんに協力を願いたいわけで」

「それ、ほんとにやるんだ」

溝口が言った。口を挟んだというよりも、独り言に近かったが、恭平は聞き逃さなかった。

「溝口さんはこの件、知ってたのか」

「知ってるものにも、桜井さんを推したのはあたしですもん」

「そうだったの？」桜井自身が溝口に訊いた。

「トーキョーローカルサイキックのフィギュアについて打診があったときには、あたしまだここでバイトをしてたんです。見てわかるように」溝口は慎次のTシャツを指差す。そこにトーキョーローカルサイキックのヒロインがプリントされているのだ。「アメモミだけど、日本人が主人公で、格好も天女っぽいじゃないですか。だから人形作家の桜井さんにデザインをしてもらったらどうかって提案したら、考えておくと申っただけで、どうしたんだろと思っっていました」

「あ、うん」溝口に問い詰められるように言われ、慎次は気圧けおされた。意味だ。「それはほら、きみが本社で働くようになったからで、言う機会を逃してしまったんだ」

「でもよかったです。こうして実現したわけですし」

溝口は自分自身に言い聞かせるように言う。

「きみはほんとに桜井さんのファンだったのか」

「ほんとにってなんで疑うんですか、社長さん」

「それはあの」

疑っていたのは桜井本人である。

私のファンだとは言っていましたけど、ほんとかどうか。

陳列即売会の会場で恭平にそう言ったのだ。しかしとうの桜井と

きたらだ。

「この仕事は溝口さんのおかげでできるようになったのね。ありがとう」

満面の笑みで礼を言っていた。

「とんでもありません」溝口は胸の前で両手を振る。「なにはともあれ、こうしていっしょに仕事ができるようになったのですからね。うれしい限りです」

いっしょに仕事？ それはちがう。溝口は偶々、この席にいるだけだ。本社の職人達がどうしてここにやってきたかを訊きたすため、このガラス張りの部屋に通じたのだ。だからといって、用が済んだからでていけとは、今更言えない。

「じつは前回の打ち合わせのあと、ネットで本を買って、読みましてね」

桜井が切りだす。口調がビジネスライクになっている。

「いま七巻まででてるけど、それ、ぜんぶ？」

「はい。英語なんで、ざっとですけど」

「言ってくれば貸したのに」

「資料は自腹で買うようにしているんです。そうすればその分、もとを取ろうって頑張れますからね。それに」桜井は薄べったいバッグから、スケッチブックを取りだすと、テーブルの上で広げた。「他

人のモノだと、こういうこともできないので」

そこではトーキョーローカルサイキックのヒロインが、様々なポーズを決めていた。どうやら本から切り取って張り付けたにちがいない。その真中にいるのは手描きだ。桜井が描いたのだろう。長い脚を肩幅程度に広げ、両手を腰に当てて、軽く上半身を捻り、凛とした顔つきで、鋭い視線をこちらにむけている。

「これ描いたの、もちろん桜井さんですよ」

いつの間にか溝口が身を乗りだし、スケッチブックを覗きこんでいた。

「私がいいと思った漫画のコマを切り取って、こうやって貼って、それを見ながら自分でイメージをつくりあげていって、人形にするなら、こんなポーズはどうかしらっていうのを描いてみたんです。打ち合わせをするにしても、なにかないと話が進まないでしょう。でも描いていたら夢中になって、止まらなくなってしまうって」

桜井がスケッチブックを捲^{めく}っていくと、ポーズを変えたヒロインが、つぎつぎとあらわれた。どれも見事なものだった。完成度が高く、人形をつくるためのスケッチの域を越えているのだ。

「どうですか？ なにか参考になるでしょうか」

「参考どころか、これを元にすぐさま制作にかかってもいいくらいだ」

「それはいくらなんでも性急過ぎますって」

桜井はビジネスライクな口調を崩さず、上機嫌な慎次にむかって注意するように言った。

「フィギュアにするのに、桜井さんが原型をつくってくれる？」

「それは無理です」慎次の頼みを桜井はきっぱり断った。「私、日本人形しかつくれないもの。できればこのデッサンを叩き台に、原型師さんと打ちあわせをして、つくってもらうのはどうかしら」

「たしかに」慎次が頷く。「桜井さんには監修ということで、要所要所で、原型のチェックをしてもらうと助かるんだけど」

「かまいませんよ。それくらいだったらいくらでも協力します」

「ウチには昔ながらの粘土でつくっているのと、3DCG専門のが半々にいるんだよね。どっちがいいか、そのへんも桜井さんに判断してもらおっかな」

トントン拍子に話が進んでいく。けっこうなことだ。しかし恭平は面白くなかった。自分のでる幕がないからだ。当然だ。これはフィギュア事業部の仕事なのだ。溝口とおなじく、桜井とへいっしょに仕事〓することはない。強^しいて言えば、弟が桜井にちよっかいをださないように見張るだけである。なんとも間抜けな役回りだ。

溝口を見ると、お預けを食らった犬みたいな顔になっていた。たとえ慎次にそんな気がないにせよ、彼女にしたら自分の企画を横取

りされたようなものである。そう考えると、気の毒に思えた。

「マジすげええ。どうなってるの、これえ？」

今度、ガラスのむこうから聞こえてきたのは、子どもの声だった。

荒川くん。いつの間にか井上くん、田島さん、そして案内役の服部も職人達に混じって、モニターを見つめている。いまペンを動かしているのは着付師の遊木だ。当然ながら今日も着物で、袖が邪魔らしく襷掛けをしていた。本社の中や鐘撞市内では見慣れているものの、しゃれたオフィスでパソコンを前にするその姿は、とても違和感があった。

「桜井さん、まだ時間あるかな。いまから原型師チームのリーダーをここに呼ぶんで、打ち合わせしちゃうない？」

「その前にちょっといいか」桜井と慎次の会話に、恭平は割って入った。「ひとつ提案があるんだが」

「なにかしら」「なんだい、社長」

桜井と慎次の声が揃う。

「そのフィギュア、俺達にも作らせてくれないか」

「俺達って？」慎次が聞き返してくる。

「本社の職人達でってことだ」

「あのジイサンバアサンで、フィギュアをつくらうっていうの？」

「どげやうって？」

「職人達の技術でつくることになるから、正確にはフィギュアじゃないな。日本人形だ」

「賛成っ」溝口がまっすぐ上に手を伸ばす。「グッドアイデアですよ、社長。あたしにもぜひ、手伝わせてくださいっ」

「それだとクライアントの意向に沿うかどうか」

「おまえんどこでつくったフィギュアといっしょに、クライアントんどこに持ってつてくればいいんだ。頼む。ジイサンバアサン達にもチャンスをくれないか」

慎次の顔をこれほどまじまじ見るのはひさしぶりだ。

おまえの弟だぞ。

父親の声がした。産婦人科の病院で、生まれたばかりの弟とはじめて会ったときのことが甦よみがえってくる。まだ三歳だったのに、鮮明に思い出すことができた。

今日からおまえは兄ちゃんなんだからな。しっかりするんだぞ。弟になにかあったときは助けてやるんだ。いいな。

いまとなつては恭平が助けてもらっている状態だ。フィギュア事業部がなければ、森岡人形は数年前に畳まざるを得なかったにちがいない。

「もしもだ」慎次は身を乗りだしてきた。兄弟ではったと睨みあっているみたいだ。「もしもクライアントが日本人形でつくったサンプル

ルを気に入って、ゴーサインがでたときにはどうなの？ 量産できる？」

なるほど。それはそうだ。さすがはフィギュアで年間億を稼ぐ男である。そこまで頭が回らなかった自分を恭平は恥じた。しかしそんな内心がバレぬよう、咳払いでごまかしてから訊ねた。

「どのくらいが見込めるのかな」

「人気があるとは言っても、映像化はされていないからなあ。完全受注生産で、三千いけば御の字だと思う」

「時期にもよるが、できない数ではない。ウチだけで無理そうだったら、そんなときは鐘撞市中の人形職人に声をかけるさ」

「そりゃ心強い」慎次は笑った。莫迦にしているのかと思ったが、そうでもないようだ。「それじゃ日本人形バージョンをつくってみてよ。そっちも桜井さんが監修しなきゃならないけど」

あっ。

そのときになって、恭平は気づいたことがあった。よくよく考えてみれば、桜井が会社を辞めた原因は、あの職人達なのだ。追いだしたと言ってもいい。そんなジイサンバアサンと仕事をするなんて、彼女にすればまっぴら御免のはずだ。

ところがである。

「私がかまいません」桜井も手を挙げる。「私としては日本人形のイ

メージでスケッチしたものですからね。なによりもアメモミのキャラクターを日本人形でつくるなんて、面白くありませんか。ぜひやりましょうよ」

マジか。

「いいんですか」思わず恭平は訊ねた。

「ええ」桜井は頷く。「宮沢さん達に承諾いただければの話ですけど。どうですかね」

「どうって」どうなんだろ。

「あたし」溝口がすつくと立ち上がった。「宮沢さん達、呼んできますね。やってくれるかどうか、いまここで訊いちゃいませよ。ですよね、部長？」

「そうだな。結論は早ければ早いほうが助かる。ちやつちやと済ましちまおう」

ちやつちやとなんかいくもんか。

弟に言いかけたときには、溝口はガラス張りの部屋をでて、宮沢達の元へ小走りでむかっていた。

「社長から説明お願いします」と慎次に言われ、恭平は職人達と幸田を含めた総勢十人を前に、フィギュアの件についての話をせざるを得なくなつた。

そのあいだ気が気でなかった。喉はからからになり、背中と腋わきの下にじつとりと汗が滲にじみでていくのを感じたほどだ。どうにか話を終わらせたものの、部長室はしんと静まってしまった。まるで牽けん制せいしあっているかのように、だれひとり口を開こうとしないのだ。やっぱ、駄目か。

過去の因縁から考えても引き受けるはずがないのだ。どうしてあんなことを言ってしまったのかと、恭平は悔やんでも悔やみ切れな
い。

ウィンウィンウィンウィン。

耳慣れぬ機械音が微かに聞こえてくる。

「うわああ」「すげえええええ」「信じられない」

見学に訪れた子ども三人の声もした。仕事場の窓際に備え付けられたどでかい機械の中を覗きこんでいる。井上くんが3Dプリンターだと言っていた代物しろものだ。出力しているところを見ているのかもしれない。

「このお嬢さんの顔を、私が描かなくちゃならんわけですか」宮沢が徐おもむろに言った。桜井の手による、トーキョーローカルサイキックのヒロインに目をむけながらだ。「これまで描いたことのない絵柄ですからねえ。できるかどうか」

「できますって」勢いこんで言ったのは溝口だ。「だってほら、宮沢

さん、来年の新作用に描いた男雛おびなと女雛めびなって、それこそこれまではちがう絵柄で、いまだきの若者っぽい顔だったですよ。とくに男雛のほうなんか、ジャニーズの男の子みたいだったし」

「それ、私も思った」溝口に同意したのは阿波三姉妹の三女、多香子たかこだ。さらに彼女は「あれよね」とジャニーズのグループと、そのメンバーの名前をだして、「あの子にそっくり」と言った。宮沢の孫が好きなのは、まさにそのメンバーなのだろう。

「このとおりにつくるとしたら立ち姿ですよね」着付師の遊木が言った。「ポーズによるけど、けっこう難しそうだな」

「着物の裾から脚が見えているが」熊みたいな巨体が前のめりになって、桜井のスケッチブックを覗きこむ。手足師の熊谷道隆みちたかだ。「この脚は当然、手足師の俺らがつくらなきゃならんわけだよな。なあ、良隆。どうすればいいんだ？」

「いきなり言われても」父の隣にいた良隆は首を捻ひねる。「やるとしたらフィギュアのを参考にしてやるしかないんじゃない？」

「参考ってどんなふうにだ」

「だから親父さ、いま言われてもわかんないつつうの」

「失敬」阿波三姉妹の長女、須磨子がスケッチブックを手に取った。傲慢ごうまんともとれるその態度からは、お腹を下した飼い猫のために泣いていた姿なんて、とてもではないが想像できない。それから眼鏡を

外すと、鼻の先がつくくらいに顔を近づける。「この子が持つてる刀
つて、日本刀みたいに鍔つばは付いているけど、ちよつとちがうわよね。
セツちゃんはどう？ 私達でつくれると思う？」

須磨子が二女の勢津子せつこにスケッチブックを渡す。彼女も長女とお
なじく眼鏡を外して、顔を近づけた。

「やれと言われればやれないこともないけど、やりたいかと言われ
れば微妙ね。タカちゃんは？」

三女の多香子は眼鏡を外さず、受け取ったスケッチブックをでき
るだけ腕を伸ばし、遠くから見るようにしていた。

「こういうところも忠実に再現しないとファンは納得しないものなん
でしょう？」

「あ、はい」多香子の唐突な質問に弟は慌てて答えた。「もちろんで
す。フィギュアの場合も、細かなディテールていに凝れば凝るほど価
値があがりますので」

「それじゃなんですか」今度は髪付師の久佐間くさまだ。多香子からスケ
ッチブックを受け取り、テーブルに広げる。「こんな現実にはあり得
ない髪型を、忠実に再現しろっておっしゃるんで？ 無理言っちゃ
いけない」

「私もこの顔を描ける自信がありません」これは峰だ。「この四十年
描いてきたものと、いくらなんでも勝手がちがいます。ですよ

ね、宮沢さん」

宮沢は答えない。腕組みをして、ふたたびトーキョーローカルサイキックのヒロインを見つめている。

「経理の立場からは賛成しかねますな」幸田が首を捻りながら言った。「見本をつくるだけで手間隙がかかって、しかも採用される可能性も低い。つまりは人件費ばかりかかって、利益があがらないわけですからね」

「総論としてはつまり」慎次が一同を見回す。「できないってことでよろしいんですかね」

「そんなああ」溝口が駄々っ子だだこのような声をあげる。「やりましようよお。みなさんの腕があれば必ずできますって。少なくともいまの段階で諦めちゃうのは早過ぎます。勿体もったいないですよ」

そうだ。勿体ない。このまま引き下がっていいのか。いいはずがない。しかしどう説得すればいいのか、情けないことに恭平は思い浮かばなかった。

「私が原因ですか」

桜井が言った。ぼそりと呖つぶやくような声だったが、はっきり聞こえた。恭平だけでなく、みんなそうだったらしい。ガラス張りの部屋にいるだれしもが、彼女に顔をむけた。

「みなさんは私関わっているのがお気に召さない」

「と、とんでもない。そんなことはありませんって」

否定したのは良隆ひとりだ。しかし桜井は耳を貸さず、さらにこうつぶけた。

「つまり私がいなくなれば、すべては丸く収まるわけですね」

会社を辞めたときとおなじ台詞を言うとき、桜井はスケッチブックを手に取って閉じ、バッグに突っ込んだ。

「ど、どうしたの、桜井さん」桜井の剣幕に、慎次はまごつくばかりだ。

「今回の話はなかったことにしてください」

「日本人形が駄目でもフィギュアがあるでしょ。そっちのほうで」

「ごめんなさい。森岡人形さんと携わろうとした私が悪かったんです」

桜井が腰をあげる。これはまずいと恭平も弟とともに引き止めようとしたときだ。

「桜井さん、あんたあ、いくつになった？」

宮沢が訊ねた。

なぜいまそれを？

そう思いながらも、自分も日本橋にほんばしの百貨店で桜井に再会したときに、年齢を訊ねたのを思いだした。

「三十です」

「ウチを辞めたときは二十四、五だったよなあ」

「そうですけど、それがなにか？」

「変わらねえなあと思ってよ。ひとの話に耳を貸さないで、自分勝手に物事を判断してしまうところなんて、昔のまんまだ。気に食わなければ、尻尾しっぽを巻いて逃げちまうところもな」

齒きぬに衣着せぬ宮沢の発言に、桜井は頬こわばを強張らせながらも、負けてはいなかった。

「その言葉、そっくりそのまま宮沢さんにお返しします」

「そういうのも昔とおなじだ」

すかさず宮沢が言い返す。宮沢は頑固で桜井は負けん気が強い。要するに似たもの同士なのだ。

「ともかく話はまだおわっちゃいないんだ。落ち着かないからお座んなさいな」

不服そうにしながらも桜井がソファに座ると、宮沢は意外なことを口にした。

「あなたの個展、見にいったよ」

初耳だ。そんなことを宮沢はおくびにもだしたことがない。恭平だけでなく、だれも知らなかったようだ。声こそださないものの、職人達をはじめ慎次や溝口までもが、一様に驚きの表情になっていた。だがだれよりもいちばん驚いているのは、桜井にちがいがなかった。

た。大きく目を見開き、宮沢を見据えている。

「去年の秋の、六本木ろっぽんぎのですか」

「会社に招待状があったから休みの日にいったんだ」

待てよ。

招待状が届いていたにもかかわらず、会社を辞めさせたことがうしろめたくて、桜井の個展に恭平はいかなかった。一度だけ、やはりいくべきかと思いついたことがあるにはあった。しかしいくらさがしても、招待状が見つからず、諦めてしまったのだ。

もしかして宮沢さんが。

「人形だけじゃなくて、映画とか舞台とかの衣装も飾ってあったが、あれ、ぜんぶ、あんたがつくったんだろ」

「ええ、まあ」

「たいしたもんさ。感心したよ。ウチで働いていたら、あんなのつくれたいもんな。あんたは辞めて正解だったんだ。いま見せてもらった絵も素晴らしかった。元の漫画よりもずっと躍動感があるし、見ているものに訴えかけてくる強い意志を感じた。私をはじめ、老いぼれどもが言いたいことを言ったが、煎じ詰めせんればなんのこたもない、こんな大層な代物をつくる自信がないってことさ。このとおりだ。どうか勘弁してくれ」宮沢は頭を下げた。「あんたが怒るのも無理はない。でもおなじ森岡人形でも、慎次さんのここはちがう。」

断ることはない。短気は損気だ。そういうところは直したほうがいい。今日は代官山まで遠出をしてよかったよ。パソコンであれこれできることがわかったし、桜井さんに会うこともできた。いつまでいても邪魔なだけだし、そろそろお暇いとまさせていただきます」

「嘘ですっ」溝口がひと際大きな声で言った。必死の形相だ。「こんな大層な代物をつくる自信がないだなんて、嘘っぱちです。これだけ大層な代物だからこそ、つくってみたい気持ちがあるはずですよ。自分に嘘をつかないでください」

「溝口さん、もういいの」

「よくないですよっ。桜井さん、おっしゃってましたよねっ、いつか森岡人形の職人と仕事がしたいって」

「いまここでその話をしなくても」

「あのひと達は、意地っ張りでワガママで、旧態依然の生きた化石のくせして無駄に健康で、死神も裸足はだしで逃げだすダイオキシンばりの老害だって」

「そこまで言っていないわ」

「呑みにいったときに散々酔っ払って、愚痴ぐちっていましたよ。それとそう、ひとりひとり灰汁あくが強過ぎて、キヤラが渋滞を起こして付きあいきれない、お互い陰口を言いあって、喧嘩ばかりして、仲直りと仲違いを半世紀近く繰り返しているなんてどうかしている」

「すまんが」宮沢が口を開いた。これだけ言われたのだ、さぞや怒っているかと思いきや、そんなことはなかった。むしろ逆だ。しょんぼりしている。彼のみならず、他の職人達もだった。「そんな私達とどうしていつしよに仕事がしたいんだ」

「ですよね」宮沢は桜井に問いかけたはずなのだが、つづけて溝口が割り込んできた。「あたしもそう思っ、桜井さんに訊いたんです。そんな厄介極まりない面倒なひと達なのに、人形をつくるとなると、気持ちをひとつにして、あんなに素晴らしいものを拵こしらえてしまうのが信じられない、各々の腕があるのはもちろんだけど、それだけではなく、長年培つちかった不思議な力が働いているとしか思えない、そこに自分加わることができなかったのが、いまでも悔しくてたまらないって、あたしに泣いて訴えたんですよ」

溝口はぜいぜいと肩で息をしている。一気に捲し立てて酸素が足らなくなったのだ。すると彼女は恭平の視線に気づき、顔をむけてきた。

「社長さんもなにか言ってください。言い出しっぺじゃないですか」
たしかにそうだ。でもなにを言おう。社長になってこの方、職人のみならず、本社にいる人間を説得したことなんて一度もなかった。やりたいようにやらせてきたと言えば、聞こえがいいかもしれないが、要するに自分はこのひと達とまともに向きあおうとしなかった

のだと、今更ながら気づく。目の端にローイングマシンが見えた。ここへくる前に、慎次が使っていたものだ。そして改めて溝口の顔を見る。赤くなった目の端には涙が滲みでていた。とても申し訳ないと思いつつも、恭平は勇気づけられた気持ちにもなった。俺がやらねばだれがやるのだと、火が点いたのだ。

「一体ありて一人なしいったい いちにん。溝口さんが陳列即売会に訪れた客に言った言葉です。溝口さんはつづけてこうも言っていました。日本人形は各部をちがう職人がつくっていて、それぞれが自分の力を十二分に發揮して、丹念に救え切れない工程を経て、一体の人形を仕上げているんだと。一体ありて一人なし」繰り返して言うから、良隆に訊ねた。「この言葉の元がなにかわかるよな」

「あ、はい」いきなり訊かれて、良隆は目をぱちくりさせながらも正解を言った。「一艇ありて一人なしいったいですよね」

「そのとおり。ボート競技に携わるものであれば、だれもが知る、いわば格言みたいなものです。良隆と私が所属していた、いまはコーチを務めている鐘撞高校ボート部では練習前にこの言葉を復唱させられます」

そこで恭平は一息つく。職人達のむこうに見学に来てきた子ども達がいた。ガラスにへばりついて、こちらを見ていたのだ。三人の手には3Dプリンターで出力をしたと思しき、色がついていない

真っ白なフィギュアが握られている。見学をひとしきりおえ、慎次に質問をするために戻ってきたのだろう。だが三人の背後にいる案内役の服部に止められているにちがいない。

あの子達のためにも早いとこ、話をおわらさなければ。

「私や良隆が高校生だったとき、ボート部の顧問は五月人形の鍾しよつき馘だにそっくりで、あだ名もそう呼ばれていました。入部したての頃、鍾馘がこう言ったんです。ボートというものは水面に浮かせば、水の流れや風の勢いで、勝手に動くものだ、だがひとが乗って、オールを漕いでゴールにむかってこそボートなのだ。正直、なにを当たり前のことを言っているんだ、このひとはと思っていたんですけどね。鍾馘はボートのことではなく、いや、それもあるでしょうが、もしかしたら人生そのものの話をしたのではないか。そう気づいたのは、だいぶ経ってからでした。毎日、与えられた仕事をこなしていけば、なにも考えずに生きていくことはできる。でもそれより自分でオールを漕いでゴールにむかっていくことが大切なのだ、鍾馘は言いたかったのではないか」

「なるほど」良隆がしきりに頷く。「言われてみればたしかにそうかもしれません」

「するとなんですか、五代目」宮沢が上目遣いで恭平を見た。「私達が水面に浮かんだままのボートだっておっしゃりたいんで？」

「ちがいます。私です。社長になってからこの方、私はなにもせず
にいました。現状維持でやり過ごすことが私の役目だと思っていた
んです。でもいまはちがう。オールを漕いでゴールにむかっていき
たい。だからお願いです。この仕事を受けてくれませんか。少なく
ともチャレンジしていただきたい。みなさんならばできるはずです。
日本人形でアメコミのキャラクターをつくって、世界に打ってま
せんか」

世界？

なにを言っているんだ、俺は。

モニターの真ん中にグレーの球体がでてきた。画面自体は平面な
ので球体のように見えるものと言うべきか。

「これを粘土だと思ってください」右隣から井上くんが言った。

「はい」恭平は素直に返事をするしかない。

「この粘土をこねるようになってモデルをつくっていくのが、スカル
プトモデリングと言います」

「こねるようになって、どうやるんだい」

「右手を持つペンの先っちょで、ペンタブレットを触れてみてくだ
い」

パソコンと恭平のあいだには、黒くて四角い板があった。訊ねる

までもなく、これがペンタブレットにちがいない。井上くんに言われたとおりにする。するとモニターに浮かぶ球体の右上に、ぼつんと小さな十字型の点がでてきた。

「この点が社長さんのペン先です。ペンを一旦あげて、球体の上に移してください」

恭平はおとなしく従う。

「そしたらですね、そこでペンをぐるぐるって回してみてもらえますか？」

「こうか」と言って、ペンを回すと十字型の点も回ったのだが、それだけではない。球体のその部分がぷっくりと膨らんでいったのだ。

「おおおおっ」思わず声を洩らしてしまう。「なんだ、これ？ どうなってるんだ」

「社長さん、リアクションがでかすぎますって」

荒川くんに笑われてしまった。

代官山のフィギュア事業部へ見学にいつてから三日が経った。三人はまだ春休み中で、先日のお礼にきましたと、森岡人形本社にひよっこりあらわれたのだ。とは言ってもいきなりではない。田島さんの母親が午前中、本社に電話をかけてきて、恭平の都合を訊ねたうえでのことだ。恭平は早めにランチを済ませ、約束の十二時半に訪れた三人を事務室に通した。

「このあいだ、代官山でウチの職人やきみ達が教わっていたのは、これだったのか」

「そうです」田島さんが答える。

「ぼくはウチにあるんで、前から使えてましたけど」

「そういうところが、みんなに嫌われる理由だぞ」

「私は井上くんのこと、嫌いじゃないわよ。荒川くんだって、そうでしょう？」

「俺は心が広いから、コイツとつきあってやってんだ」

「このモデリングのソフトって、前にはここにありませんでしたよね」

自分が話題になっているのに、ふたりの話に耳を貸さず、井上くんは恭平に訊ねてきた。

「今朝、届いたばかりなんだ」

三日前、職人達といっしょに代官山から鐘撞までいっしょに帰ってきたのだが、会社には戻らず、駅前にあるいつもの中華料理店に直行し、決起集会と称して、呑み会をおこなった。トーキョーローカルサイキックの人形をつくることにしたからだ。

五代目、世界に打っていきましょう。世界だ、世界。

禁酒中の宮沢はノンアルコールのビールを呑みながら、宴のあいだに繰り返していた。そしてお開きとなったとき、職人達全員

に、モデリングのソフトを買ってほしいとねだられたのである。

「これ使って、日本人形をつくっちゃうんですか」

井上くんは目を輝かせて訊ねてくる。

「さすがにそこまでは」

でもどうだろう。近い将来、あり得ないことではない。それこそ井上くんが大人になる頃には、やっけていてもおかしくないことだ。

「もう少しお教えしましょうか」

「頼むよ」井上くんをお願いすると同時に、デスクの上でスマートフォンが震えた。「ちょっとごめん」

桜井からのLINEだった。代官山をでる間際、LINEを教えしてほしいと桜井に頼んだのは慎次だった。すると彼女は、だったら社長にもと教えてくれたのだ。

〈これってマズくありませんか〉

その一言だけで、ネットのニュースが添付されていた。東南アジアの某国でクーデターが起きたらしい。なぜそれがマズいのか、恭平はすぐに気づいた。

フィギョア工場の建設予定地がある国だったのだ。

〈つづく〉